

トルコギキョウのセル成型育苗における用土

藤原博文 (大分県温泉熱利用花き園芸試験場)

Hirofumi FUJIWARA : Medium of Cell-tray for raising seedlings of *Eustoma grandiflorum*

近年、トルコギキョウの栽培は非常に増加したが、育苗は苗の生育の緩慢さと不揃いから困難とされている。そこでその対策として、セル成型トレイを利用した育苗について用土の面から検討を行ったので、その概要を報告する。

1. 材料及び方法

品種‘ホーリースモールレディ’を供試した。育苗用土は、プラグミックス (G社製)、楯土 (楯木が腐植化したもの)、慣行用土 (淡色黒ボク土67%、腐葉土33%) を基土とし、それぞれに与作V1号を0、20、33、50%の体積比で混入した用土と、与作V1号の単体とした。セル成型トレイのセルの大きさは、上面が2cm角、深さが4cmで容積が約10ccのセルを用いた。播種期は1990年10月1日、播種方法は高分子吸収体を用いた流体播種で、1セル当たり約3粒播種とした。播種後25日間はミスト室で管理し、その後はガラス室内で管理した。間引きは播種後30日目と45日目に行った。また、育苗時の施肥は行わなかった。温度管理は夜間最低約15℃とし、昼間25℃で換気した。供試株数は1区30株で無反復とした。生

育調査は定植時の12月5日に行った。

2. 結果及び考察

第1表のとおり、トレイ内での生育は、基土がプラグミックスの場合、与作V1号の混入割合50%の用土が最も優れ、与作V1号の混入割合が少なくなるにつれ生育が劣る傾向がみられた。基土が楯土の場合、与作V1号の混入割合33%の用土が最も優れた。プラグミックス、楯土共にその単用では生育が劣った。基土が慣行用土の場合、単用でも生育は良かったが、与作V1号を混入することで優れた。混入割合による差は明らかではなかった。また、与作V1号の単用では、生育が劣り、葉色が黄白となる個体が認められた。

以上の結果から、トルコギキョウのセル成型トレイを用いた育苗において、プラグミックス、楯土、慣行用土を基土とした場合、与作V1号を混入することで苗の生育と揃いが良くなった。与作V1号の混入割合は、プラグミックスでは50%、楯土では33%、慣行用土では20~50%が良かった。

第1表 育苗用土が苗の生育に及ぼす影響

育苗用土		葉長 ¹⁾	葉幅 ¹⁾	節数	根長 ²⁾	地上部乾物重 ³⁾	地下部乾物重 ³⁾	全体乾物重 ³⁾
	% %	cm	cm		cm	mg	mg	mg
プラグミックス : 与作V1号=100:0		0.4	0.3	1.6	5.1	0.9	1.4	2.3
”	= 80:20	1.2	1.0	2.3	5.8	11.6	8.3	19.9
”	= 75:25	1.1	0.8	2.1	5.3	8.7	7.5	16.2
”	= 67:33	1.3	1.1	2.7	5.3	14.9	9.0	23.9
”	= 50:50	1.7	1.3	2.9	5.0	20.5	10.7	31.2
楯土 : 与作V1号	=100:0	0.8	0.6	2.0	5.6	5.3	3.7	9.0
”	= 80:20	1.7	1.3	2.9	5.6	20.7	9.8	30.5
”	= 75:25	1.7	1.3	3.0	5.2	21.3	9.3	30.6
”	= 67:33	2.0	1.5	3.0	4.8	30.6	10.1	40.7
”	= 50:50	1.8	1.3	2.9	4.6	25.5	10.1	35.6
慣行用土 : 与作V1号	=100:0	1.3	1.0	2.6	5.6	14.6	10.0	24.6
”	= 80:20	1.7	1.3	3.0	5.4	21.4	12.1	33.5
”	= 75:25	1.5	1.1	2.8	5.1	17.8	8.4	26.2
”	= 67:33	1.6	1.3	3.0	5.4	22.3	10.4	32.7
”	= 50:50	1.7	1.3	2.9	5.4	22.5	10.8	33.3
与作V1号	=100	1.5	1.2	3.0	4.8	17.5	9.7	27.2

注) 1) 最大葉 2) 最長根 3) 80℃で96時間乾燥処理後の重さ